

カリキュラム・マネジメントの高校現場での実践

総合的探究の時間「長高メソッド」の場合

片岡 勝規

千葉県立長生高等学校

ktok-katsunori@nifty.com

<http://k-katsunori.la.coocan.jp/>

『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総合的な探究の時間編』によると、「これまで以上に総合的な探究の時間を教育課程の中核に位置付けるとともに、各教科・科目等との関わりを意識しながら、学校の教育活動全体で資質・能力を育成するカリキュラム・マネジメントを行うことが求められ」ている。これらの要求が学校現場でどのように実現できるのか。ここでは千葉県立長生高等学校のスーパーサイエンスハイスクール事業のひとつとして、2015年度から実施しているSS総学「長高メソッド」におけるカリキュラム・マネジメントの実践例を報告する。報告のテーマは以下の3つである。1.長高メソッドは学校の課題をどのように解決しようとしたか 2.長高メソッドは生徒のどのような資質・能力を育成しようとしているか 3.カリキュラム・マネジメントを推進できる教員の資質・能力とは何か なお、1,2については報告者が執筆した「スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書」からの引用である。

1 長高メソッドは学校の課題をどのように解決しようとしたか SS総学「長高メソッド」研究開発の経緯——2017年長生高校SSH報告書より

1.1 SSH推進に関する教職員アンケートの実施

本校における第1期SSH研究の3年目にあたる2012年12月に、今後のSSHの推進の方向性を職員に問いかけるアンケートを実施した。「SSH推進に関する教職員アンケート——長生高等学校全日制の未来像についての意識調査」（有効回答数49）の集計結果は、翌2013年の1月に「SSH推進に関する教職員アンケートまとめと集計」として報告した。その概要は以下の通りである。

問1 今年で3年目をむかえる本校のSSH事業をあなたはどのように評価しますか。

・全体的に生徒たちにとって成果があったという評価の一方で、担当職員や生徒にとっての負担の大きさも指摘されている。

問2 2010年に本校が指定を受けた5年間のSSH研究指定を、さらに5年間更新することについて、あなたはどのように考えますか。

・更新に際しては、SSHの対象生徒を現状より狭く限定するとともに内容の専門性を深める方向性ととも、これまでの成果をSSH以外のコースも含めた生徒全体に還元する方向性も示されている。地域の中학생たちに本校の学校の特色をアピールするために更新を積極的に支持する

意見が多い一方で、更新に反対する意見もある（6件）。

問3 本校の理数科と普通科がこれからどうあるべきかについて、あなたのご意見を聞かせてください。

・理数科のあり方について、旧来の、理系にも文系にも進学できる学力の高い生徒たちを集める方向性に戻すべきであるとする意見がある一方で、理系に特化した理数科にすべきだという意見もある。いずれにしても、理数科が長生高校の牽引力となることが望まれている。

問4 本校が今後どのような道を進むべきか、長生高等学校の来るべき未来像についての、あなたの積極的なご意見を聞かせてください。

・①進学指導や受験指導の充実。②文武両道、部活動や特別活動を通じた人格の陶冶。③SSHも含めた生徒の主体性を育てる教養的教育。などが両立でき、人口が減少する中で、地域や中学生たちにとって魅力ある学校になるべきであるとの意見があった。

1.2 理数科将来構想検討会議

2013年4月、10名の理数科将来構想検討チームが編成され、校長より次の2点についての検討を委嘱された。①今の理数科の現状と課題を明確にすること。②次期SSHに向けた理数科の在り方についてまとめること。会議は計5回開催され、同年7月には職員会議で以下の提案が行われた。

理数科将来構想検討チームによる職員会議提案（2013年7月）

① 今後の理数科の軸

・理数科は3年間全員SSHとし、特色を持たせる。・生徒の進路を狭めない教育課程とする。・進学実績を伸ばす

② 理数科のカリキュラム

・希望する生徒には文系大学進学にも対応できるカリキュラムとする。なお、理数科の教育課程については、土曜活用の可能性も含めて検討する。

③ 全校SSH

・普通科の「総合的な学習の時間」をSSHの「課題研究」とする。

1.3 「長高メソッド」実施までの経緯

(1) 全校SSH・長高メソッド研究チームによる原案作成

理数科将来構想検討会議の提案を受けて、2014年4月にSSH推進委員会は職員会議において、以下のように長高メソッド実施の観点を示すとともに、「全校SSH・長高メソッド研究チーム」の編成を提案した。

全校SSH「課題研究」実施の観点（要旨）

- ① 実施学年と指導体制—1年次での生徒テキストと職員マニュアルを使った学年主導の指導
- ② 課題解決能力の育成—第1期SSH方法論の全生徒への還元
- ③ 進路選択の一環としての学問研究—1年次の進路指導との連結
- ④ 学力向上のためのメソッドの理解と実践—「長高メソッド」による学力向上

「全校SSH・長高メソッド」検討チームは、「この指止まれ」方式で参加希望者を募集して編成された。このチームは全校SSHのプランニングを行いながら、長高メソッドの研究を通して長生高校の学力観を確立するとともに、生徒用テキストと職員用マニュアルの編集にも協力する

ことを目的とする。チームの会議は4月から9月までに6回実施し、10月の職員会議で以下のような全校SSH実施概要を提案した。

SSHベーシックプログラム「SS総学」(仮称)実施概要

① 実施学年指導体制——1年次での生徒用テキストと職員マニュアルを使った学年主導の指導

全校SSHは1年次で実施。学校設定科目「SS総学」(仮称)は、総合的学習の時間をあて、ロングホームルームと道徳の時間と連携しながら実施する。生徒用テキスト「長高メソッド」と職員用マニュアルを全校SSH検討チームが準備し、実際の指導はこれまでの総合学習と同様に学年主導で、一部学年外の職員の協力を得ながら行う。

② 問題解決能力の育成——第1期SSH方法論の全生徒への還元

人文科学、社会科学、自然科学のジャンルの中から自分の興味あるテーマを設定し、テーマ研究論文の作成等を通して問題解決能力を育成する。生徒は夏休み前までに研究ジャンルを設定し、9月以降ガイダンスを行ってテーマを絞る。後期からゼミ形式(※)で研究を行い、年度末には全ての生徒がテーマ研究についての報告書(レポート)を完成できることを目標とする。また、この研究を大学受験に向けての進路選択を考える機会とする。

※ ゼミ形式の活動については、大学の学部学科をイメージした分類のテーマを16種類程度(実施の際には13テーマとなった)を設定する。主に学年の職員で指導を行うが、ジャンルによっては1学年以外の職員の協力を要請する。

③ 学力向上とグループワークの方法の理解と実践——「長高メソッド」による指導

全校SSHのプログラムの中で、課題研究で養成される実践・応用的な学力に加えて、大学受験等で必要とされる基礎的学力の向上の方法と、文化祭等のホームルーム活動で必要とされる議論やグループワークの方法を指導する。これまで行われてきた高校入学後の導入期指導とホームルーム活動の指導をより効果的なものにするために、テキスト「長高メソッド」を活用する。

(3) テキスト「長高メソッド」の編集

全校SSH・長高メソッド検討チームは、全校SSHの実施概要を検討すると同時に、「長高メソッド」テキストの編集を行った。テキストの項目と担当者は以下の通りである。(注:担当者名は割愛した)

I. 学習法の科学

II. 社会実践の科学

III. 研究法の科学

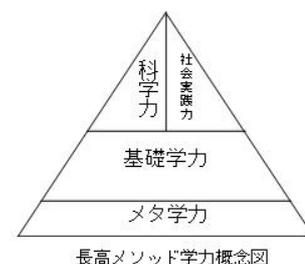
2 長高メソッドは生徒のどのような資質・能力を育成しようとしているか 長高メソッドの学力観——2016年長生高校SSH報告書より

長生高校全校SSH「長高メソッド」は、以下のような学力観に基づいて、全校SSH「SS総学」の時間をはじめとする長生高校の学習活動全体の中で、その学力を身につける方法を示す。

創造力を培う3つの学力

- ① 礎となる知識と理解を得る力：メタ学力が築く基礎学力
- ② 他と協力し目的を達成する力：社会実践力
- ③ 問題を発見し探究する力：科学力

「創造力」とは、既存の知識を生かしながら、社会に求められている新しい価値を作り出す能力であると考えることができる。しかし、新しい価値を作り出すためには、様々な能力を総合的



に発揮しなければならない。そこで、「長高メソッド」では、創造力を培う学力として3つの学力を設定する。

① 礎となる知識と理解を得る力「メタ学力が築く基礎学力」

新しい価値を創造するためには、基本的学力としての知識と概念の理解が不可欠である。現在の大学入試センター試験で問われている学力も、基礎的な学習の達成の程度であり、大学入学後に必要とされる基礎学力であるとともに、社会生活の中で新しいアイデアを提案する思慮深い市民にとって、必要不可欠な教養であると考えられる。これまでの、学校の学習活動の中でも、基本的学力の定着は重視されてきた。しかし、「長高メソッド」ではそれに加えて、生徒自らが自分の学力を向上させる学力をメタ学力と定義して、その定着を図る。メタ学力の具体的な内容は以下の通りである。

- I. 学習対象を面白いと思う感性
- II. 自分から学ぼうとする行動力
- III. 学習ベースを考える思考力
- IV. 学び方を考える計画力
- V. 地道に反復を続ける努力
- VI. 学習法を改善する思考力

「長高メソッド」では、基礎学力を支える基本的能力としてのメタ学力を育成する実践を行うとともに、さらに効果的な実践のための研究を行う。

② 他と協力し目的を達成する力「社会実践力」

社会の中では、個としての能力の開発とともに、他者と力を合わせてチームワークを発揮しながら目的を達成する能力も必要とされる。集団の中で個々の力を生かすための方法を学び、グループでの合意の形成や役割を分担するための円滑なコミュニケーション能力を高めることで生産的な活動を行うことができる。高等学校では、ホームルームでの話し合いや文化祭の発表準備など、学級活動や部活動の実践などを通してこの力が育まれる。「長高メソッド」では、会議の方法や文化祭の準備の具体的な進め方とともに、集団の中でいかにしてチームワークを生かして目的の達成に導くか、その方法論についても学ぶ。

③ 問題を発見し探究する力「科学力」

新しい価値を創造するためには、既存の知識を習得する学力だけではなく、未知の領域の問題を発見し探究する学力が不可欠である。この学力を身に付けるためには、課題探求の方法を理解した上で、実際に探究活動を行うことが必要である。それは講義型の学習ではなく、生徒自ら試行錯誤する課題探究型の学習の実践を通して獲得される学力である。長生高校第I期のSSHでは、「『連携』でつくる新理数教育」のテーマで、人とのかかわりの中で自ら考え主体的に問題解決する力を持ち、国際社会に対応できる自己表現力を持った人材の育成を目指した研究を実施した。「長高メソッド」の課題研究では、その成果を生かして、理科・数学だけでなく、人文科学や社会科学の分野にもジャンルを広げて生徒が研究活動を実施する。

3 カリキュラム・マネジメントを推進できる教員の資質・能力とは何か

3.1 スーパーサイエンスハイスクール（SSH）研究指定が学校にもたらしたもの

2010年に千葉県立長生高等学校はスーパーサイエンスハイスクールの研究指定を受けた。本来、SSHの事業は「高等学校等の理数系教育に関する教育課程等の改善に資する実証的資料を得るため」（「スーパーサイエンスハイスクール実施要項」2002，文部科学大臣決定）に行われている。そのため、本校ではSSH推進部を中心にして、新しい理数教育のためのカリキュラム改善の

研究が行われてきた。

それらの研究開発の機動力となっていたのが、毎年度末に発行する研究開発実施報告書であった。各事業別の研究開発担当者がその年度の末ごとに研究成果を原稿としてまとめることによって、研究のPDCA サイクルを回すことが実行された。もちろん、報告書を書くことが研究の目的ではないのだが、2月の原稿の締め切りを目標にして各年度の研究開発が進められ、どのように研究成果を実証するかについて、それぞれの担当者は工夫と苦労を重ねていた。

各年度の報告書を比較すると、年を経るごとに各担当の報告書のレベルが上がっていることを読み取ることができる。これは、SSHの研究指定を通して生徒の課題研究を指導するスキルの向上を目指す中で、本校職員の研究スキルそのものの向上にもつながったと考えることができる。とくに初期段階の長高メソッドの実践の中では、「長高メソッドテキスト」の編集作業そのものがカリキュラム開発に対するモチベーションとなった。テキスト制作の締め切りをゴールに、研究をまとめた結果は100ページ超の成果物となった。主に若手の教員で構成された全校SSH・長高メソッド検討チームのメンバーは、テキストの原稿を作成するプロセスの中で、自らの資質を向上させることができた。

また、毎年各学年に所属する教員に加えて、学年外の教員も長高メソッドの13講座のゼミ指導の担当を行なっている。毎年20名超の教職員で普通科全生徒の所属する講座を担当しているため、5年間で延べ120人を超える教職員が課題研究の指導を行ってきた。これも長生高等学校の職員の探究活動に関する指導力を向上させる要因になっている。

このように、長生高等学校におけるSSHの研究指定はその研究活動を通して、特に課題研究指導の分野における教員の資質・能力の向上をもたらしたことが推測される。

3.2 生徒に求める資質・能力と教員に求められている資質・能力

SSHの実践により報告書であれテキストであれ、締め切りを目標に研究結果を成果物としてまとめることが教員としての資質・能力を向上させることがわかった。そこで2017年、当時の校長大山光晴氏の呼び掛けで、若手の教員たちの授業技術の向上を狙った研究会を立ち上げた。アクティブラーニング・ワーキンググループと名付けられたその会は、全日制と定時制のメンバーで構成され、アクティブラーニング型授業の実践とルーブリック評価をテーマとした共同研究が行われた。研究の結果は21名のメンバーの執筆により、『アクティブラーニング型授業の実践と評価の試み「授業版 長高メソッド」の開発を目指して〜』と題した研究紀要にまとめられ、県内の高等学校を含む各所に配布された。

この試みは現校長の土屋俊一氏の元でも継続し、2018年度には『学習モジュールによるアクティブラーニング型のカリキュラムの試み』というタイトルで研究紀要が発行された。2019年現在もアクティブラーニング・ワーキンググループは若手の教員を中心に研究を継続するとともに、本校の130周年記念事業の寄付によって導入された、アクティブラーニングルームの有効活用方法を検討している。

長高メソッドは、主として生徒の課題研究によって創造力を培う資質・能力を育成するプログラムである。同じように、教員による共同研究もカリキュラムマネジメントをはじめとする新しい時代の教育を担う資質や能力を育成するに違いない。その意味において、生徒に求める資質・能力とこれからの教員に求められている資質・能力はほぼ同型の枠組みで考察することが可能であろう。

参考文献

1. 文部科学省(2019)『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 総合的な探究の時間編』
学校図書

- 2.田村知子・村川雅弘・吉富芳正・西岡加名恵 (2016)『カリキュラムマネジメントハンドブック』ぎょうせい
- 3.田村知子 (2014)『カリキュラムマネジメントー学力向上へのアクションプランー』日本標準
4. 高木展郎(2017)『『学力の3要素』をバランスよく育むため、学校全体でカリキュラム・マネジメント推進を』『VIEW21 教育委員会版 2016 Vol.4』ベネッセコーポレーション
- 5.村川雅弘 (2017)「カリキュラム・マネジメントが教育課程を軸にした学校教育の改善・充実の好循環を生み出す」『Kawaijuku Guideline 2017.7・8』河合塾
- 6.千葉県立長生高等学校 SSH 推進部 (2016)『平成 27 年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実践報告書 (経過措置 1 年次)』千葉県立長生高等学校
- 7.千葉県立長生高等学校 SSH 推進部 (2017)『平成 28 年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実践報告書 (第 1 年次)』千葉県立長生高等学校
- 8.千葉県立長生高等学校 SSH 推進部, 学力向上委員会, アクティブラーニング・ワーキンググループ (2018)『アクティブラーニング型授業の実践と評価の試み～「授業版 長高メソッド」の開発を目指して～』千葉県立長生高等学校
- 9.千葉県立長生高等学校 SSH 推進部, 学力向上委員会, アクティブラーニング・ワーキンググループ (2019)『学習モジュールによるアクティブラーニング型のカリキュラムの試み』千葉県立長生高等学校